

47, 48)、立つ(出33:10)、踊る(Ⅱサム6:14)、手をたたき叫ぶ(詩47:1)、手を上げる(詩134:2, Ⅰテモ2:8)、ひざまずく(ダニ6:10)、歩いたりはねたりする(使3:8)、ひれ伏す(黙5:14)などである。このような表現はその状況に合ったものであり、威厳のある神の臨在に対する心からの応答である限り神に受入れられた。姿勢は様々であっても、神を敬うまことの礼拝にはいくつかの共通の要素がその特徴として見られる。礼拝はみな、礼拝をする当人ではなく主を高めるものである。

(1) キリスト者の礼拝を導くかぎとなる原則が二つある。(a) まことの礼拝は霊とまことによって行われる(→ヨハ4:23注)。つまり礼拝は単なる肉体的、精神的活動ではない。まことの礼拝は霊的行動で、神がご自分を啓示してくださったこと、特に御子イエス・キリストを通して啓示してくださったことに対して応答することである(→ヨハ14:6)。礼拝では人間の霊と神の聖霊との間に心からの交わりが持たれる(Ⅰコリ12:7-12)。(b) キリスト者の礼拝の実際は新約聖書の教会の型に合ったものでなければならない(→使7:44注)。今日キリストに従う人々は新約聖書全体に描かれている礼拝と同じ種類の表現と体験を願い求め期待すべきである(→使緒論 解釈の原則)。

(2) 旧約聖書の礼拝の特徴はいけにえをささげることである(→民28:-29:;)。キリストは十字架の上で犠牲を払ってこの制度を完全に成就されたので、キリスト者の礼拝で血を流す必要はなくなった(→ヘブ9:1-10:18)。主の晩餐(聖餐式)の聖礼典(象徴的儀式)を通して、新約聖書の教会はキリストの一度限りの犠牲を記念して絶えず祝い続けて来た(Ⅰコリ11:23-26)。教会はまた「賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげ」るように勧められている(ヘブ13:15)。私たちがまた「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげ」るべきなのである(ロマ12:1注)。

(3) キリスト者の礼拝には神を賛美することが必要である。イスラエル人の神礼拝でも賛美は重要な要素だった(詩100:4, 106:1, 111:1, 113:1, 117:;)。それは初期のキリスト者の礼拝でも同じだった(使2:46-47, 16:25, ロマ15:10-11, ヘブ2:12, →「賛美」の項 p.891)。

(4) 神を賛美する上で大切なのは、詩と賛美と霊の歌を歌うことである。旧約聖書には、主に対して歌うようにとの勧めが満ちている(Ⅰ歴16:23, 詩95:1, 96:1-2, 98:1, 5-6, 100:1-2)。主イエスの誕生のとき、天の全軍勢が突然賛美の歌を歌い出した(ルカ2:13-14)。新約聖書の教会は賛美をする共同体だった(Ⅰコリ14:15, エペ5:19, コロ3:16, ヤコ5:13)。新約聖書のキリスト者は知性のことば(人間のことば)で歌い、霊によって(霊のことばまたは「異言」→Ⅰコリ14:15注)歌ったと聖書は記録している。賛美を礼拝の名前を借りた催し物のように考えたり、実際にそのように行うことはなかった。歌と音楽は礼拝の重要な表現ではあるけれども、音楽が礼拝の根本であると見なさないようにしなければならない。音楽がまことの礼拝の代りになってはならないのである。音楽は確かに人々を感動させ心を動かし、まことの礼拝をささげるようにさせるけれども、時には感情を圧倒することもある。そうすると人々の注意は神からそれていくことになる。そして神ではなく、音楽や歌い手、感情などを礼拝することになってしまう。

(5) 祈りは礼拝のもう一つの重要な部分である。旧約聖書の聖徒たちは祈りを通して絶えず神と交わっていた(創20:17, 民11:2, Ⅰサム8:6, Ⅱサム7:27, ダニ9:3-19, →ヤコ5:17-18)。新約聖書の教会の指導者たちも主イエスが天に昇られたあと祈り続けた(使1:14)。そして祈りはキリスト者の礼拝の中で無くてはならない部分になった(使2:42, 20:36, Ⅰテサ5:17, →「効果的な祈り」の項 p.585)。この祈りは自分自身のための祈りや(使4:24-30)、ほかの人々のために祈るとりなしの祈りだった(ロマ15:30-32, エペ6:18)。キリスト者の祈りにはいつも神への感謝が含まれなければならない(エペ5:20, ピリ4:6, コロ3:15, 17, Ⅰテサ5:18)。賛美と同じように祈りも人間のことばや異言で祈ることができる(Ⅰコリ14:13-15)。

(6) 罪の告白(神に対する罪を公に認めること)は明らかに旧約聖書の礼拝では重要だった。神はイスラエル人のために「贖罪の日」を定めて(レビ16:, →「贖罪の日」の項 p.223)、神に対する罪を民族全員が告白するときにされた。神殿奉獻の祈りの中でソロモンは罪の告白が重要であることを認識していた(Ⅰ列8:30-39)。神の民が律法をどれほどないがしろにしていたかを知ったとき、エズラとネヘミヤはユダヤ民族

全体を熱烈な公の告白の祈りに導いた(ネヘ9:)。主イエスは弟子たちに祈りの模範を示されたとき(主の祈りと言われることが多い)罪の赦しを求めると教えられた(マタ6:12)。ヤコブは信仰者たちに互いに罪を告白するように教えている(ヤコ5:16)。私たちは霊的失敗や間違いを認めることによって責任感が生れ、神の慈しみ深い赦しを確信できるようになる(1ヨハ1:9)。

(7) 礼拝の中には神のことばの朗読とその真理の解き明かし(説教)もある。旧約聖書の時代には7年ごとの仮庵の祭りのときにイスラエルの民がみなモーセの律法の朗読のために集まるように神は命令された(申31:9-13)。旧約聖書の礼拝のこの部分を最も明らかに示している例は、エズラとネヘミヤのときである(→ネヘ8:1-12)。聖書朗読は安息日の会堂での礼拝でも無くてはならない部分になった(→ルカ4:16-19, 使13:15)。同じように新約聖書の信仰者が礼拝のために集ったときには、神のことばを聞き(1テモ4:13, →コロ4:16, 1テサ5:27)、みことばの真理に基づいた教えと説教と実際的な勧めを受けたのである(1テモ4:13, Ⅱテモ4:2, →使19:8-10, 20:7)。

(8) 旧約聖書の神の民が主の庭(礼拝の場所)に集まるときはいつでも十分の一(収入または収穫の十分の一)とささげ物を持って来るように教えられていた(詩96:8, マラ3:10)。新約聖書ではパウロがコリントのキリスト者たちにエルサレムの教会の資金を集めるために、「あなたがたはおのおの、いつも週の初めの日に、収入に応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい」と言っている(1コリ16:2)。これは神へのまことの礼拝は計画的でなければならないこと、特に十分の一と神へのささげ物をささげることににおいてはそうでなければならないことを示す例である(→「十分の一とささげ物」の項 p.1603)。

(9) 新約聖書の礼拝には独特の要素があった。それは(今も)聖霊の働きとキリストの弟子たちを通して現される聖霊の様々な現れだった。キリストをあがめ、教会を建上げるための御霊の「賜物」とその現れの中には、知恵のメッセージ、知識のメッセージ、特別な信仰、癒しの賜物、奇蹟の力、預言、霊を見分ける力、異言を話すこと、異言を解くことなどがあった(1コリ12:7-10)。初期のキリスト者の礼拝のカリスマ的(御霊に導かれる、情熱的)性格についてパウロはさらに詳しく描写している。「あなたがたが集まるときには、それぞれの人が賛美したり、教えたり、黙示を話したり、異言を話したり、解き明かしたりします(1コリ14:26)。パウロはコリント人への手紙の中でこのような礼拝の賜物を導き制御する原則を提供している(→1コリ14:1-33注)。その中で最も重要な原則は礼拝中での聖霊の賜物の現れは会衆全体を強め助けるものでなければならないということだった(1コリ12:7, 14:26, →「御霊の賜物」の項 p.2138)。

(10) 新約聖書の礼拝にあるもう一つの独特な要素は聖礼典、つまり洗礼と主の晩餐(聖餐式)という象徴的な式を行うことだった。主の晩餐(「パンを裂く」→使2:42)は五旬節(弟子たちを満たし力を与えるために神が聖霊を送られた日 使2:46-47)の直後、信仰者の間で毎日守られていたと思われる。後には少なくとも毎週行われていた(使20:7, 11)。キリストが命じられたバプテスマは(マタ28:19-20)、キリストを信じる回心者が起こり教会に加えられるたびに行われた(使2:41, 8:12, 9:18, 10:48, 16:30-33, 19:1-5)。

まことの礼拝者への神の祝福

まことの礼拝が行われるときに神は多くの祝福をもって応答して下さる。神は次のような約束をしておられる。

- (1) ともにいて(マタ18:20)、親密な交わりをして下さる(黙3:20)。
- (2) ご自分の栄光をもって導き、取囲んで下さる(⇒出40:35, Ⅱ歴7:1, 1ペテ4:14)。
- (3) 祝福を雨のように注がれる(エゼ34:26)。特に平和をくださる(詩29:11, →「神の平和」の項 p.1301)。
- (4) あふれる喜びを与えられる(詩122:1, ヨハ15:11)。
- (5) 心からの信仰をもって祈る祈りに応えられる(マコ11:24, ヤコ5:15, →「効果的な祈り」の項 p.585)。
- (6) 聖霊の新しい満たしとキリストのために生き、人々にキリストを伝える大胆さを与えられる(使4:31)。

- (7) 聖霊を通して特別で明らかなたちで働かれる(1コリ12:7-13)。
- (8) 聖霊によってすべての真理に導かれる(ヨハ15:26, 16:13)。
- (9) みことばと聖霊の教えと力によってきよめ、成長させ、神の目的のために分離される(ヨハ17:17-19)。
- (10) 慰め、励まし、力づける(イザ40:1, 1コリ14:26, 11コリ1:3-4, 1テサ5:11)。
- (11) 罪と義とさばきの現実性をさらけ出される(→ヨハ16:8注)。
- (12) 礼拝の中で罪が示され信仰によって応答した人々を霊的に救われる(1コリ14:22-25)。

まことの礼拝の障害

神の民が礼拝に集まり、見た目にはよいと思われることをしていても、まことの礼拝が行われているのか、神が賛美を受入れ祈りを聞いておられるという保証はない。

(1) もし礼拝が単に口先だけ、かたちだけのものであって、人々の心が神に向けられていないなら、神はその礼拝を受入れてくださらない。キリストはパリサイ人の偽善を厳しく非難された。パリサイ人は神の律法の規則に宗教的には従っていたけれども、心は神から遠く離れていた(マタ15:7-9, 23:23-28, マコ7:5-7)。エペソの教会にも同じような非難が向けられている。人々は主を礼拝し続けていたけれども、キリストへの本当の愛を失っていた(黙2:1-5)。パウロはコリント人への手紙の中で、罪を悔い改めず、仲間のキリスト者のことを配慮しないで主の晩餐にあずかる人々は自分たちにさばきを招いていると警告している(1コリ11:28-30, →11:27注)。神を礼拝することについての基本的なことは、心が神と正しい関係にありさえすれば、神はその礼拝を受入れてくださるということである(ヤコ4:8, →詩24:3-4)。

(2) まことの礼拝に対するもう一つの障害は、霊的に妥協した生活、罪、不道德である。サウル王が神の命令に従わなかったとき、神はそのいけにえを拒まれた(1サム15:1-23)。神の民はいけにえをささげ、聖い日を祝っていたけれども、イザヤは「罪を犯す国、咎重き民、悪を行う者どもの子孫、墮落した子ら」と叱った(イザ1:4)。そういう訳で、主はイザヤを通して次のように宣告された。「あなたがたの新月の祭りや例祭を、わたしの心は憎む。それはわたしの重荷となり、わたしは負うのに疲れ果てた。あなたがたが手を差し伸べて祈っても、わたしはあなたがたから目をそらす。どんなに祈りを増し加えても、聞くことはない。あなたがたの手は血まみれだ」(イザ1:14-15)。新約聖書の中で主イエスはサルデスの礼拝者たちに「わたしは、あなたの行いが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない」(黙3:2)ので、目を覚ますように勧めている。同じようにヤコブも主イエスの弟子たちに、この世界のよこしまな信仰や行いから離れない人々の利己的な祈りには神は聞かれないことを示している(ヤコ4:1-5, →「効果的な祈り」の項 p.585)。神の民が自分たちの生活を霊的に純粋に保つなら、神は力強い臨在を現し礼拝を受入れてくださると期待することができる(詩24:3-4, ヤコ4:8)。礼拝は単なる集会や儀式であってはならない。それはあらゆる状況の中で、ことばと行動をもって、神を最高に尊び、敬い、あがめる生き方そのものでなければならぬ(ロマ12:1, ヘブ13:15, 16)。

神の民が自分たちの生活を霊的に純粋に保つなら、神は力強い臨在を現し礼拝を受入れてくださると期待することができる(詩24:3-4, ヤコ4:8)。礼拝は単なる集会や儀式であってはならない。それはあらゆる状況の中で、ことばと行動をもって、神を最高に尊び、敬い、あがめる生き方そのものでなければならぬ(ロマ12:1, ヘブ13:15, 16)。